

地域材を利用したブロイラー鶏舎の整備に関連して

平成19年の肉用若鶏（地鶏等を除くブロイラー）の出荷羽数は6億2300万羽で、岩手県は鹿児島県（19%）、宮崎県（18%）に次いで全国第3位（15%）となっています。

二戸地域は古くから全国有数のブロイラー産地として歴史を有し、常時870万羽が飼養され、地域経済に大きく貢献する産業となっています。

しかし、鶏舎建設後30年以上が経過し、耐用年数を越えた鶏舎も見受けられ、防疫対策や安定生産のための計画的な施設更新による産地の若返りが必要となっています。

このような背景もあり、二戸普及指導区では地域材を活用したブロイラー鶏舎の更新や増設、新築工事を関係者に働きかけていますが、十文字チキンカンパニー(株)からブロイラー鶏舎建築に係る業界知識を得ましたので紹介します。

(1) 鶏舎資材は輸入品

日本のブロイラー産業の歴史は、欧米の100年以上の畜産技術（戦地への肉類供給のための生産システムとして発達）を導入したもので、日本には30年の歴史しかなく、現在もブロイラーの生産システムや設備資材の90%以上は欧米からのノウハウと輸入に依存している。

(2) 地域材活用のアプローチ

鶏舎建設は輸入商社がシステム鶏舎建設の大半を掌握しており外材使用となりやすいが、個人農場

主は地元建設業者を優先する場合があります、制度資金も活用することから地域材活用は取組み次第。

なお、改修工事では地域材(カラマツ)が使用されている模様。

(3) 鶏舎の規模

平均的な鶏舎規模は、企業の直営農場の場合は300坪（1箇所10棟）、個人農場は200～250坪（1箇所に4～5棟）で、鶏舎様式の主流は「ウインドレス鶏舎」と呼ばれる窓のほとんどない木造畜舎で、1棟当りの木材使用量75m³となっているようです。

(4) 飼養羽数

- ① 1坪で標準60羽
- ② 1年の出荷は5回転
- ③ 1鶏舎300坪の場合、年間9万羽の出荷
- ④ 出荷までの餌は体重の3倍必要で、1羽当たり約6kg必要で、1棟分で540t必要。

